

■研究推進委員会 活動計画書

学術委員会承認日：平成 29 年 2 月 18 日

名 称	生態工学研究推進委員会
委員長	氏名（所属）：倉本宣（明治大学）
幹 事	氏名（所属）：八色宏昌（景域計画（株）） 連絡先（e-mail アドレス）：yairo@keiiki.co.jp
その他 構成員	氏名（所属）： 板垣範彦（いきものランドスケープ）、井上剛（（株）地域環境計画）、大澤啓志（日本大学）、勝野武彦、亀山章（（公財）日本自然保護協会）、黒田貴綱（日本大学）、近藤哲也（北海道大学）、園田陽一（（株）地域環境計画）、趙賢一（（株）愛植物設計事務所）、徳江義宏（日本工営（株））、中尾史郎（京都府立大学）、並木崇（（公財）世界自然保護基金ジャパン）、中村忠昌（（株）生態計画研究所）、春田章博（（株）環境グリーン・エンジニア）、日置佳之（鳥取大学）、逸見一郎（（株）地域環境計画）、森本幸裕（京都学園大学）、養父志乃夫（和歌山大学）
目 的	生態工学の技術の体系化と普及活動
活動計画 及び 想定される 成果 (1年目)	<p>1. 活動計画</p> <p>(1)平成 29 年度日本造園学会全国大会ミニフォーラムの企画立案 平成 26 年に都市再生特別措置法に基づく立地適正化計画制度が創設されコンパクトなまちづくりが進められている。一方、都市近郊や農村地域等ではこれらのまちづくりにより創出される緑地等の再生・創出に関する研究及び技術開発が途上にある。これらの緑地は広域であるため低密度かつ効果的な国土的管理が課題であり、生態工学のアプローチからは課題に対して生物多様性保全の観点からエコロジカルでかつ持続的な管理、地域経済の内部化等の研究および計画技術の開発が求められている。</p> <p>そこで本委員会では平成 29 年度のミニフォーラムにおいて国交省や関連自治体との連携により「立地適正化計画と生物多様性」をテーマとして、立地適正化計画に伴い再生・創出される緑地を生物多様性保全の観点から方向性を議論し、今後の研究及び計画技術開発に資することを目指す。</p> <p>(2)「生きもの技術ノート」および「用語解説」の企画編集 昨年度に引き続き月に 1 回の研究推進委員会を開催し、学会誌に連載中の「生きもの技術ノート」（年 4 回）および「用語解説」の企画立案、編集作業を継続的に実施する。</p> <p>(3)出版企画 平成 28 年度日本造園学会全国大会ミニフォーラムのテーマ「信州の絶滅危惧種の保全と生態工学」および「【展示】信州のランドスケープエコロジー」の成果を受けて、知人書館より「絶滅危惧種の生態工学」の出版および当該出版準備を行う。</p> <p>2. 想定される成果 時節の課題である立地適正化計画に対して生態工学的アプローチにより研究を進めることにより、ランドスケープ分野からの研究開発の推進及び都市計画分野に対する社会的発信が期待される。</p> <p>また、学会誌を通じて生態工学に関わる技術的事例および最新の関連用語に関する情報提供を学会員に対して行い、あわせて、出版活動を通じて、生態工学に関わる学術と技術の体系化および普及が図られることが期待される。</p>

<p>(2年目)</p>	<p>1. 活動計画</p> <p>(1) 平成 30 年度日本造園学会全国大会ミニフォーラムの企画立案 平成 29 年度のミニフォーラム「立地適正化計画と生物多様性」を受けて、生物多様性地域戦略の今後の制度のあり方と研究および計画技術の開発を目的として「(仮) 制度 10 年目に向けた生物多様性地域戦略」を開催する。生物多様性地域戦略は、立地適正化に関わる個別自治体の具体的取り組みとしても重要であり、根拠法の生物多様性基本法施行（平成 20 年 6 月）から平成 30 年 6 月に 10 年を迎える。10 年を節目として次の制度展開に向けたあり方を議論し、研究及び計画技術の開発を進める。</p> <p>(2) 生態工学に関する企画展示の開催 平成 28 年度日本造園学会全国大会において「生態工学に関する企画展示」を開催することを目指して企画立案、ポスター募集、展示準備を進める。</p> <p>(3) 「生きもの技術ノート」および「用語解説」の企画編集 月に 1 回の研究推進委員会を開催し、学会誌に連載中の「生きもの技術ノート」（年 4 回）および「用語解説」の企画立案、編集作業を継続的に実施する。</p> <p>2. 想定される成果</p> <p>立地適正化に関わる個別自治体の具体的取り組みに関わり、かつ制度 10 年を向える生物多様性地域戦略に関して生態工学的アプローチにより研究を進めることにより、ランドスケープ分野からの立地適正化計画に対する対外的提言を行うことが可能となり、あわせて制度の改善を通じた計画技術の進歩に寄与することが期待される。</p> <p>また、学会誌を通じて生態工学に関わる技術的事例および最新の関連用語に関する情報提供を学会員に対して行い、生態工学に関わる学術と技術の体系化および普及が図られることが期待される。</p>
--------------	---